

## 実践哲学ノート (23)

谷口 孝男

### Notizen über die praktische Philosophie (23)

Takao TANIGUCHI\*

#### Abstract

Die vorliegende Arbeit forscht nach dem Sinn des Menschen als menschliches Naturwesens. Der Kern des Sinnes des Menschen ist aber nichts anderes als Menschlichkeit (Humanität). Also behandle ich die praktische Philosophie überhaupt, namentlich die menschliche praktische Philosophie Yoshiaki Utsunomiyas. Dabei zugleich möchte ich sein Denken selbst und auch seine Denkweise lernen.

Danach möchte ich den Sinn des menschlichen Naturwesens auf Grund der Menschlichkeit (Humanität) aufklären und ferner den Menschen an sich selbst als systematische Totalität der drei Lebenstätigkeiten, die aus Konsumieren, Produzieren und Verkehren bestehen, zeigen.

Der Sinn des Menschen enthält die Menschlichkeit (Humanität) als sein übergreifendes Moment in sich. Daher müßten wir vor allem die Menschlichkeit (Humanität) untersuchen.

【補論11】[白樺派との対話(1)・武者小路実篤(1)]

【『人生論・愛について』(新潮文庫版)(1)】

[目次]

人生論

新しき村に就ての対話

自分達に力がないと云うことを恥じよう

祈り

人類の意志に就て

生命の意志

愛について

東洋と西洋の美術  
真理先生の遺書

饅と鮭  
小さい寂しさ  
根と実  
画と文学  
花と人間の美しさ  
沈黙の世界

[ ・人生論 ]

[ 序 (昭和13年9月5日) ]

( 1 )

「この本をかく時、何となく「人生論」という題で書いて見たくなり、こんなものを書いてしまった。論とは言えないかと思うが、論でないとする必要もないと思う。看板より中身が悪いとも思わない。相変わらず僕らしいもので人生私観とでも言った方がいいのかと思うが、始め題がはっきり浮んだので、その題のままにしておく。」

[ 対話 ]

「カントによれば、ほんとうの哲学とは、「学問的な、生きる知恵」の探究である。武者小路の「人生論」とカントの「哲学」は、「私観」と「学問的」、平たく言えば「主観的」と「客観的」において区別されよう。広く言えば、文学と哲学の区別もそうしたものであろう。

しかし大事なのは、主観的な文学は、客観的な哲学に、「看板より中身が悪い」と言えるか、ということであろう。

私は、『人間の意味のフィロソフィア(第一巻)』と『人間の尊厳と人間愛のメタフュシカ』において、自分の「天命」を、おぼろげながらにはあるが、知ったように思う。「天命」は「生きる意味」とも解し得るであろう。

今後、私は「趣味としての哲学」とでも呼び得るような「哲学の形式」を追求したく思う。国語辞典によれば、「趣味」は、《物事のもっている面白み・味わい・情趣、物事の味わいを感じる能力、仕事としてでなく、楽しみとして愛好するもの》、を意味する。文学から学ぼうとするのも、「趣味としての哲学」の構想実現に向けた一つの努力である。それに関連して、哲学研究者の呼び方について、であるが、「哲学者」、「哲学徒」、「哲学屋」などのいずれも、「趣味としての哲学」には似つかわしくない、と思える。犀星の「女人」なる呼び方に着想を得て、「哲学人<sup>てつがくびと</sup>」と呼んでは、如何なものか、と勝手に考えている。」

( 2 )

「今まで書いたものと重複するところもあるが、この本だけ読めば僕が人生に就て感じていることがわかってもらえるように書きたかったので、他の本を読む必要のないように書くことにした。他の本とは表現もちがいがいい、見せた人生の切断面もちがうと思う。いくら新鮮な切断面に切

りこめたかと思っている。」

[対話]

「僕が人生に就て感じていること」を武者小路から聞かせてもらえることは、それだけでも喜ばしいことである。人生を「愉しむ」ことを実践してみたい。」

(3)

「あとは本文を読んで戴きたい。」

[対話]

「こういう短い「序」もなかなかよい。「省略の美学」とも言い得るか。」

[一]

(4)

「自分というものが意識に浮んだ時は既に自分が生まれていた時である。つまりその時自分が人間として生まれていたのだ。そして恐らく自分は何年かさきに意識を失うであろう。その時自分は人間ではなくなっている時だ。」

[対話]

「武者小路は、人間の厳密な意味での生死を、自己意識の生成消滅として捉える。それ故、彼によれば、人間とは、自己意識をもったもの、のことなのであろう。

フォイエルバッハの『キリスト教の本質』の冒頭における、意識一般と自己意識の区別について、興味のある方は一瞥されたい。

ところで、自己意識の有無で、更には意識一般の有無で、人間の存否を決定する考えには熟慮が必要であるように思える。植物状態の人間は、人間ではないのであろうか。」

(5)

「自分は生まれて五十三年と何ヶ月になる、その間自分は人間として生きて来た。自分は人間以外の世界をまるで知らない。自分の生きている間は永遠に比べれば一瞬にすぎない。しかし生きている自分にとっては、永遠の昔から生き、永遠の未来まで生きているような気もしている。人間以外の世間は見ることも、感じることも、信じることも出来ないのだ。自分は人間として生まれたことを不幸とは思っていない。しかし人間は完全なものでなく、いつも健康なものでもなく、又幸福を約束されているものでもない。だから人間に生まれたものには一面同情しないわけにはゆかない。よく生まれて来たことと祝したいと同時に、幸福であれと祈りたい。」

[対話]

「「人間以外の世界」「人間以外の世間」 無限の神の国 に生まれなかったことを、べつに不幸とは思っていない。人間として生まれたことを、ありのままに、肯否両面を包んで見ることが、大切である。人間は、いつも「幸福を約束されているもの」でもない。だから武者小路は

「幸福であれと祈りたい」のであろう。《幸福》」

(6)

「自分は生まれた、又生まれ来る人間にたいする、自分の挨拶としてこの本をかきたく思っているのだ。」

[対話]

「この本は、同時代のすべての人間にたいする「自分の人間としての挨拶」である。」

(7)

「僕は自分が学者でなく、知ることの少ないことを残念に思うが、しかし赤児の心を持って、人間をつくったもの、人間が生まれるようにしたものの意志を感じ、そして人々にその意志を伝え、人々がどう生きるのが本当かということ、自分が信じ切っている通りに書いておきたいと思うのだ。」

[対話]

「前段落の「挨拶」とは、「どう生きるのが本当か」についてのメッセージなのであろう。「どう生きるのが本当か」とは、「いかに生きるべきか」という意味でもあろう。このような問いを立てる精神は、解答如何にかかわらず、健全である。」

(8)

「自分が人間に生まれた挨拶として、これだけのことは人間に言っておきたいと思っている。」

[対話]

「武者小路は「人間に対する挨拶」として書く。私は「私自身に対する挨拶」として書く。私自身に対する徹底した理論的実践的執着（善く生きる）のないところに、人類の平和的共存は存立し得ないように、思われる。」

(9)

「しかし書きたいことは多いが、うまくかけるかどうか、まだ自分にはわからないのだ。うまくかけるといいがと自分で思っている。根気よく書けるだけ書いて見たい。」

[対話]

「根気よく書けるだけ書きたい。」「根気よく」という姿勢は、哲学においても重要であらう。「粘り強くこつこつ」と言っても、よからう。」

[二]

(10)

「人間は何の目的で生まれたのか。又何か目的があつて自然は人間を生まれるようにしたのか僕にはそれはわからない。ただ人間は生まれるべくして生まれた。単細胞動物が地上にあらわれ

た時、既に人間のようなものが生まれることは予約されていたように思う。僕は学者でないから、こういう説明はあまりしない方が無難だが、自分の感じていることを書いておく。まちがっているところは、誰かなおしてくれるであろう。」

[ 対話 ]

「人間は生まれるべくして生まれた」というのは、本当であろう。人間の誕生に、何らかの目的論を挿し込むことは、よく見受けられることではあるが、稔りのない空疎な問いと言う他ない。間違った問いに、正しい答えは出るべくもないのである。

「まちがっているところは、誰かなおしてくれるであろう」とする悠然とした書き方もあるのである。感心した。一人で何もかもできないのだし、またそうする必要もないであろう。フォイエルバッハの愛した、ゲーテの言葉「ただ人類全体のみが自然を認識し、ただ人類全体のみが人間的なものを生きる」(宇都宮芳明氏『フォイエルバッハ』、作品58, 101頁)、さらにその言い換えとも言えるフォイエルバッハの言葉「個々の人間が知ることができず、なすことができないことも、人間が協同すれば知ることができ、なすことができる」(宇都宮芳明氏『倫理学入門』、作品92, 139~140頁、『将来の哲学の根本命題』)もまた、きわめて健全な精神と言えるであろう、と思う。」

(11)

「単細胞の動物はどうして生まれたのか。何かの実に不思議な、又とないような機会で生まれたのか。元素あるところ、否、電子のあるところ、必ず生まれるべくして生まれたのか、それは知らない。しかし生まれたのだ。」

[ 対話 ]

「いまのところ、こういう話題に、私は、まったく関心がない。それゆえ、沈黙。ただ、エンゲルスは、その『自然弁証法』のなかで、同趣旨のことを述べていることを、指摘しておく。」

(12)

「それが生まれた以上、そして分裂することで繁殖する以上、無限にそのものが繁殖し、その数無量、浜の真砂以上にふえたである。その何億何兆その何億倍という子孫の内にはある機会に変種が生まれたであろう。」

[ 対話 ]

「かんたんに言えば、進化論の話題である。」

(13)

「ともかく何億年と経過した内に実にいろいろの動物がこの地上に生まれた。そして或ものは既に死滅して地上に再び姿をあらわさないものもある。」

[ 対話 ]

「人間もこうなるのかも知れない。私は、そのようなことに、まったく関心がない。永遠ということはありえぬものであろうがゆえに。滅亡するときは、滅亡する。」

(14)

「しかし現在地上に存在する動物はどの位あるか、自分は知らない。しかしその動物の中で一番不思議な動物が人間であることは知っている。地上は遂に人間によって支配されたのだ。他の動物は段々人間の許しを得るものだけが存在し得るようになるであろう。」

[ 対話 ]

武者小路は「人間中心主義」の思想を持つ人なのであろうか。この段落を見る限り、そのように思わざるを得ない。「人間中心主義」は、人間が爾余の動物を含む全自然の支配者であるとする傲慢な思想である。

「先に引用したように、カントによれば、自然界の一員として見られた限りでの人間には、他の動物と比較して、価値において特に卓越している点はない。人類のみ絶対的価値を認めようとするのは、自然界の中心に人類を据える人間（人類）中心主義に由来する偏見であろう。このことは、人類の維持のために自然全体の維持（環境保全という意味での）が説かれるにしても、同様である。カントの考えに沿って言えば、人類の維持は、個々人の人格の絶対的価値が保証されてはじめて意義をもつ。動物園の人類舎に保護されることを、ひとはだれも望まないであろう。それは地球という牧場であっても、変わらない筈である。」（宇都宮芳明氏『哲学の視座』、224頁）

\*前掲『哲学の視座』、218～219頁

\*宇都宮芳明氏『人間の間と倫理』、114～115頁、200頁、220～221頁

\*カント『道徳形而上学』、中央公論社『世界の名著39カント』594～595頁  
556～557頁

以上の文献をも見られたい。いずれにせよ、人間は「人間中心主義」の思想を懐くなんらの根拠をも有しないのである。（拙論「哲学宣言」、『人間であることの意味への問い』を参考として、一瞥されたい。）

(15)

「現在はまだ人間に有害無益の動物、殊に下等動物は存在し得るが、しかし昔から見ると段々そういうものが減じて来たことは事実と思う。」

[ 対話 ]

偏狭な人類中心主義。「人類愛とは、偏狭な人間（人類）中心主義のことではない。（略）人類愛は人類全体を他のなにもまして愛することではなく、出会いくる他者をいずれも等しく代置不可能な「汝」として愛することである。」（『人間の間と倫理』、221頁）

( 続 )